

2018年夏大会発表のまとめ

二十世紀ドイツにおける聖なるものの共同体論
—シェーラーとフォン・ヒルデブラントにおける宗教現象学の視点から

横山陸（日本学術振興会特別研究員/東京大学）

本発表は、二十世紀初頭のドイツにおける「聖なるもの」をめぐる議論を、マックス・シェーラーの宗教現象学の観点から再考することを試みた。思想史的に見ると、シェーラーは現象学を宗教学に応用した最初の人物であるが、論考「宗教の諸問題」（1921年）において、シェーラーは宗教心理学へ対抗するかたちで、みずからの宗教現象学を展開している。まず本発表は、宗教心理学とのアプローチの相違から、シェーラーの宗教現象学を特徴づけた。宗教心理学ということでシェーラーの念頭にあるのは、とりわけウィリアム・ジェームズ、ルドルフ・オットー、ゲオルグ・ジンメルの宗教論であるが、こうした宗教心理学は、宗教の固有性としての「聖なるもの」を、個人の心的内面の経験へと還元してしまう。それに対して、シェーラーの宗教現象学は、宗教現象を心的作用とその対象との相関関係において捉えようとする。それによると、心的作用への応答作用として、対象である「聖なるもの」に「神的なもの」が啓示されるという。こうしてシェーラーは宗教現象の固有性を、個人の心的内面の経験に回収し尽くされない、「応答作用」による啓示という側面から確保しようとしている。

つぎに本発表は、こうした啓示現象の実質を、シェーラーの『倫理学における形式主義と実

質的価値倫理学』(1913年)における価値感情の議論から解釈することを試みた。シェーラーは価値志向が充実されるさいの充足感を幸福と見なし、志向し充実される価値の種類の違いによって、幸福の諸形式を区別している。そのなかで、宗教的な価値である「聖」価値の充足感、最も深い幸福の形式として「浄福」と呼ばれるが、それをシェーラーはある種の救済感情として特徴づけている。浄福は、世界全体を肯定されたものとして開示する形而上学的感情であり、同時に、そのなかで他者たちの価値志向とその充足感としての幸福がまた理念的に肯定される道徳的感情だとされる。

最後に本発表は、シェーラーの議論からは、こうした「聖価値」の充足感としての「浄福」が、宗教的共同体の背景感情として解釈できることを示した。つまり、世界と他者とに開かれた「浄福」がある種の背景感情となって、他者たちとの連帯が成立することをシェーラーは示唆している。本発表は、シェーラーの実質的価値倫理学をカトリシズムの枠組みにおいて再構成したフォン・ヒルデブラントの現象学にも、こうしたモチーフを見いだせることを指摘した。

発表後の質疑応答では、有益な指摘をいただくことができた。それらは、主にシェーラーの現象学がほんとうに心理主義を免れているのか、という点を指摘するものだったが、それに対して、まったく「免れている」と答えることは難しい。とはいえ、次の二点には注意すべきだろう。第一に、フッサールと違いシェーラーにとって、現象学的還元とは、客観の側にある世界の実在性に関する判断を停止することではなく、主観の欲求や衝動を停止することを意味する。したがって現象学的還元は、主観の欲求や衝動から離れて—さらに主観が企投した因果関係から離れて—世界を解釈することを可能とする(世界開示性)。それゆえシェーラーの現象学は観念論的実在論を意味し、「神的なもの」の実在性を擁護する余地が生まれる。第二に、シェーラーは宗教心理学への批判を通じて、宗教現象の本質を個人の主観的体験に見る近代的な宗教観に対抗して、客観の側からの応答としての啓示の役割を再評価している。シェーラーの理解する啓示は、たしかに近代以前の啓示概念ほどの客観性をもっていない。しかしシェーラーによれば、「聖なるもの」への志向性が、客観の側からの応答である「啓示」によって充実されるさいの充足感が「浄福」であり、この「浄福」が宗教的共同体の背景感情と見なされる。したがって「啓示」はなお間主観的な現象であり、その意味では、ある種の客観性を具えている。